



Title	現代中国語における「二重目的語」構文の認知言語学的研究：プロトタイプから周縁例への拡張を中心に
Author(s)	葛, 靖
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54312
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【25】	
氏 名	葛 靖
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 4 0 6 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学 位 論 文 名	現代中国語における「二重目的語」構文の認知言語学的研究－プロトタイプから周縁例への拡張を中心に－
論 文 審 査 委 員	（主査） 言語文化研究科教授 古川 裕 （副査） 言語文化研究科教授 杉村 博文 世界言語研究センター准教授 堀川 智也 言語文化研究科教授 青野 繁治 言語文化研究科准教授 加藤 昌彦

論文内容の要旨

1. 本稿の背景と目的

現代中国語において動詞の後に名詞成分が二つ続く文形式 $[N_0+V+N_1+M+N_2]$ 、いわゆる二重目的語構文に関する研究はこれまで数多く発表されているが、その中で最も関心を集めているものは、やはりモノの＜授受GIVE&TAKE＞を表す構文に関する研究であろう。

たとえば、以下に挙げるものがその代表的な例文である。

$[N_0+V + N_1 + M + N_2]$

1. 我 送了 他 一个 苹果。

私 贈る-PERF 彼 一つ リンゴ

J1. 私は彼にリンゴを一つプレゼントした。

二重目的語構文についての研究は、その関心とするところが例Iに見られるように＜授受＞の意味を表す典型的なタイプのものに集中している。

ところで、ここで注目すべき点は、日本語と英語における二重目的語構文はモノの移動に関して単方向、すなわち＜授与GIVE＞しか表すことができないのに対し、中国語の二重目的語構文は＜授与GIVE＞と＜取得TAKE＞双方向の移動を、同じ構文形式を用いて表すことができることである。次に挙げる例2は＜取得＞を表す用例である。

2. 她 偷了 我 一副 耳环。

彼女 盗む-PERF 私 一对 ピアス

J2. 彼女は私からピアスを（一对）盗んだ。

このような＜取得＞を表す文を二重目的語構文とみなすかどうか、また、みなす場合は＜授与＞と＜取得＞のどちらがプロトタイプの意味であるかについては、いまだにその意見が分かれるところである。

一方、同じように $[N_0+V+N_1+M+N_2]$ という文形式を構成しながらも、＜授受＞を表さない非典型的な用例も数多く存在する（下記例3-6）。ただ、このような周縁のタイプを主な考察対象として取り上げた研究は、筆者の知る限りでは、あまり多く見受けられない。

$[N_0 + V + N_1 + M + N_2]$

3. 蚊子 咬了 我 一个 包。

蚊 咬む-PERF 私 一つ 腫れもの

4. 那碗面 吃了 他 一头 汗。

あのラーメン 食べる-PERF 彼 頭いっぱい 汗

5. 擦桌子 擦了 我 一身 汗。

テーブルを拭く 拭く-PERF 私 全身 汗

6. 我 打了 他 一个 巴掌。

私 殴る-PERF 彼 一つ ビンタ

7. 爸爸 放了 桌上 一包 东西。

お父さん 置く-PERF 机の上 一包 もの

J3. 蚊に刺されて、腫れものが一つできた。

J4. ラーメンを食べて、彼は頭いっぱい汗をかいた。

J5. テーブルを拭いていて、私は全身に汗をかいた。

J6. 私は彼にビンタを一発食らわせた。

J7. お父さんは机の上に紙包みを置いた。

認知言語学の観点からみた場合、文の形式が同じであるならば、それらは相互に何らかの形で関連性を有し、また何らかの共通点を共有しているはずであると考ええる。

そこで、本稿はこれまでの本研究に関連する先行研究を概観しその問題点を指摘した上で、Goldberg (1995) が提唱する構文文法の枠組みで、周縁のタイプの二重目的語構文を中心に $[N_0+V+N_1+M+N_2]$ の形式を成す文を考察する。そして、二重目的語構文の共通スキーマを見出し、そのスキーマを提示した上でプロトタイプの意味と拡張の意味を規定する。最終的には、拡張の動機づけと拡張ルートを明らかにすることが本稿の目的である。

同時に、二重目的語構文のスキーマとの共通性が認められる、現代中国語に見られるその他の構文（【“得”補語構文】、【方向補語を含む構文】、【存現構文】など）も視野に入れ、これらの構文と二重目的語構文との構文ネットワークを提示することを試みる。

2. 本稿の構成と主張

本稿は、 $[N_0+V+N_1+M+N_2]$ の形式を持つ「二重目的語」構文を三つのタイプに分けて、それぞれが有する特徴について考察・分析を行った上で結論を導くという方法論、つまり帰納法による論議を展開していく。

本稿の主な構成は、次の通りである。

【タイプⅠ】＜授受＞を表す 典型的 $[N_0+V+N_1<ヒト>+M+N_2]$ (例1-2)

【タイプⅡ】＜授受＞を表さない 非典型的 $[N_0+V+N_1<ヒト>+M+N_2]$ (例3-6)

【タイプⅢ】＜授受＞を表さない 非典型的 $[N_0+V+N_1<トコロ>+M+N_2]$ (例7)

第一章では本稿の研究範囲とそれに関する問題点を指摘し、第二章で二重目的語構文に関するこれまでの主な先行研究を概観する。

第三章では、上記【タイプⅠ】の典型的二重目的語構文について考察を行い、関連する先行研究の成果を再検証した上で、＜取得TAKE＞を表す $[N_0+V+N_1+M+N_2]$ も二重目的語構文に属することを確認する。また本章で、【タイプⅠ】構文の意味、すなわち二重目的語構文のプロトタイプの意味は「 N_0 が意図的に $N_1 \rightarrow N_2$ を移送する」であると指摘し、 N_0 が授影者、 N_1 が受影者、 N_2 が授受対象の役割を果たすと規定する。この＜移送＞行為は N_0 の意図によって行われるため、構文全体としては＜する＞的であると考ええる。

第四章では、上記【タイプⅡ】の構文に関する考察を行い、非典型的な二重目的語構文における N_2 が抽象的なモノあるいは新しく出現したモノであってもよいこと、また N_0 がモノ/コトである場合、構文全体に「話者の主観性を表す」という付加の意味合いが含まれることを指摘する。【タイプⅡ】構文は「 N_0 の影響により、 N_2 が N_1 に抽象的に移送される」という意味を表し、 N_0 がモノ/コトである場合の＜移送＞行為については、 N_0 の意図によるものではないため、構文全体の動作性は【タイプⅠ】よりやや低いと考える。

現代中国語には、本来ヒト名詞を支配できない動詞が二重目的語構文に用いられるとヒト名詞を支配できるようになる、という特徴がある。また、現代中国語における数量表現は、通常 $[V+M+N]$ が無標の語順であるが、名詞成分 N がヒト名詞である場合は、 $[V+N+M]$ の語順が採られるようになる。この二つの現象が生じる理由としては、二重目的語構文の構文圧力を受けるためであるという構文論的動機が存在することを主張する。

第五章では、これまで注目されることの少なかった、さらに周縁的な範疇に属する上記【タイプⅢ】の構文を取り上げ、【存現構文】との対照分析を通して、構文の意味と生起条件を考察する。【タイ

ブⅢ】構文は「N₀の影響力により、N₂がトコロN₁に移送される」という意味を表し、ここで用いられるVについては「+空間移動性」という意味特徴が含まれると考える。また、本来V自身に「+空間移動性」を持たない動詞であっても、この構文に入ることにより構文圧力を受け、「+空間移動性」を持つようになることも指摘する。ここで用いられるN₁の形式はトコロ化を経た名詞が一般的であり、その意味役割はN₂が存在する/していたトコロである。また、【タイプⅢ】の構文は<移送>行為の<動的>な性格をプロファイルさせたい時に用いられるため、構文全体は<する>的となるが、【タイプⅠ】と一部の【タイプⅡ】よりその動作性は低いと考える。

第六章は本研究のまとめとして、典型的二重目的語構文【タイプⅠ】と非典型的二重目的語構文【タイプⅡ】、【タイプⅢ】との構文リンク、ならびに【“得”補語構文】、【方向補語を含む構文】、【存現構文】との構文リンクについて検討する。

ここでは二重目的語構文のスキーマを「外的影響力によるモノの<移送>」と規定し、【タイプⅠ】から「具体的な内容から抽象的な内容へ」という拡張ルートを経て【タイプⅡ】へと拡張してゆくこと、【タイプⅢ】へは【タイプⅠ】構文が「所有権の移動は物理的移動」というメタファーに動機づけられ、構文の意味がモノの所有権の<移送>からモノの<空間移動>へと拡張した結果であることを主張する。

本稿では、モノの<移送>を、あるヒトの領域あるいはトコロに（/から）あるモノが<出現APPEAR/消失DISAPPEAR>するイベントと捉え、【タイプⅡ】構文はあるヒトの領域を<終点/起点>とし、抽象的なモノが<出現/消失>することを表し、【タイプⅢ】構文はあるトコロに（/から）モノが<出現/消失>することを表すと考える。

【“得”補語構文】、【方向補語を含む構文】はともに動作行為が行われた後の、動作対象の上に生じた状態の変化を表す。変化した状態の<出現>を抽象的なモノとして捉えるという認知プロセスを経ることで、【タイプⅡ】構文が【“得”補語構文】、【方向補語を含む構文】とリンクすると解釈できることを主張する。

【存現構文】は、[N₁+V+M+N₂]の語順で、トコロに（/から）あるモノが<存在BE AT/出現/消失>するというイベントを表す。この点において、【存現構文】と【タイプⅢ】構文との間に関連性が読み取れる。ただし、【タイプⅢ】構文では<移送>行為を起こす授影者が言語化される（言語化されていない場合は補足可能）のに対し、【存現構文】では<出現/消失>のトコロとモノ/ヒトしか現れず、授影者が言語化されない点では大きく異なる。

【タイプⅢ】構文は<する>的意味を表し、【存現構文】は<なる>的意味を表すという点で明確な違いがある。

【存現構文】と【タイプⅢ】構文との間には、以上の相違点が認められるものの、二構文は部分的関係においてリンクしており、お互いに関連し合っているものと考える。

第七章では本稿のまとめを行い、最後に今後の課題について触れる。

3. 本稿の意義

認知言語学の立場から現代中国語の二重目的語構文について研究を行った論文は数多くあるが、いわゆる典型的なタイプから周縁的なタイプまで幅広く取り扱い、特に周縁的なタイプを中心に、構文文法の理論を用いて全面的に考察、分析を行った研究は、まだ少ないと言える。また、これまでの二重目的語構文に関する研究では、現代中国語に存在する、他の構文を視野に入れた上で、二重目的語構文の本質を探究したものも少ない。したがって、本研究ではこれまでになかった新しい視点からのアプローチによって、これまで指摘されることのなかった二重目的語構文及びそれに関連した構文についての新たな認識を提示することができると考える。

さらに、中国語教育の面においては、現代中国語の[N₀+V+N₁+M+N₂]構文及びそれに関連する構文などが、実際にどのような場面で、それぞれどのような使い分けをして用いられているのかという問題が、中国語学習者にとって悩みの種となっているが、この点においても、本研究が問題解決の糸口を提示できるものと考える。

本稿は、大量の用例を分析した上で、[N₀+V+N₁+M+N₂]構文の共通スキーマを提示し、現代中国語における二重目的語構文の生起条件を体系的に総括して提示する。これが本稿の第一義的な研究意義である。その上で、周縁的なタイプの二重目的語構文を他の構文と関連づけ、現代中国語において広義の<出現/消失>を表すいくつかの構文間における構文ネットワークを提示する。一見、関連性が

ないと思われる二つもしくはそれ以上の構文が、実際は広い意味において相互にリンクしていることを指摘し、二重目的語構文の本質を解明することも大きな研究意義である。

キーワード：構文文法、二重目的語構文、周縁的、外的影響力、移送、授（受）影者、構文スキーマ、構文リンク

論文審査の結果の要旨

『現代中国語における「二重目的語」構文の認知言語学的研究—プロトタイプから周縁例への拡張を中心に—』と題された本博士論文は、現代中国語における、いわゆる「二重目的語」構文の成立・生起条件とその拡張メカニズムを論じた意欲的な研究である。

中国語文法の研究では、通時的にも共時的にも、典型的な「二重目的語」構文に関する分析と記述について既に数多くの研究成果が蓄積され、中国語教育の現場においてもその成果が応用されてはいるが、この構文自身のプロトタイプから周縁例への拡張および他の構文との相互リンケージという側面については未だ本格的な研究が見られなかった。

本論文において評価すべき第一点は、従来からの研究では十分な注意が払われてこなかったこれらの言語現象に対して、認知言語学、特に構文文法の立場から、一貫した枠組みによって包括的な分析と記述を行ったところにある。

まず、本論文では、現代中国語の典型的「二重目的語」構文が事物の<授与 GIVE>のみならず<奪取 TAKE>をも描くこと、すなわちGIVE & TAKE（やりもらい）の双方向性を表わし得ることを議論の出発点とし、この構文がプロトタイプから引き継いだ形式的な同一性という圧力を保ちながら<授受>を表わさないタイプ、すなわち従来「二重目的語」とは見なされてこなかった周縁的な構文タイプへと拡張してゆくありさまを、豊富な用例を挙げつつ、動詞（句）の意味特徴および間接目的語となる名詞の有生（ヒト）性と場所（トコロ）性に着目しながら分析を行っている。この理論的な分析を展開する過程において合計475個の動詞を各構文タイプにおける用法に分類した作業は、この研究に対して包括性と実証性の厚みを加えており、この点も評価できるポイントである。

また、典型的には<授受>を表わす「二重目的語」構文が<出現、存在、消失>を表わす存現構文と通底しているという観点は既に先行研究が指摘しているが、更にこの構文が予想外のイベントが<偶発的に出現>した結果の状態を描く“得”補語構文や方向補語を含む構文へと拡張しているという本論文の仮説は、より綿密な検証に耐える必要があるものの、従来にはない新たな独創的観点を提供するものである。

本論文は、全篇を通してたいへんこなれた日本語によって記述されており、直接目的語が時間量と動作量を表わす成分である場合の議論などまだ一部分は立証性に欠ける記述が散見するものの、総じて明確な議論の展開がなされている。

以上のような点を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士（言語文化学）の学位を得るにふさわしい研究論文であると判断した。